

青森縣下の海運史料

古田 良 一

私が日本海運史の研究を始めたのは、もう三十五六年も前のことであるが、東北大学に奉職して仙台に來てから、東北地方の海運史料を調査しようと思つて、先ず第一に青森県に着手した。その理由は、青森県は本州の北端にあつて三方は海に面し、日本の海運史では重要な位置にあるから、多分史料も豊富に残っているであらうと考へたからである。幸に財団法人青藤報恩会から研究費の補助を受けることができたので、昭和六年十月と昭和九年十月との二回に亘つて、今は故人となつた助手山本枅藏君と共に青森県下を旅行した。ちようどその頃県庁には正史好きでこれも故人となられた佐々木新七氏が親字官で教育課長で居られたから、研究旅行には大へん都合がよかつた。

この二回の調査によつて得たところを、青藤報恩会時報第六十号へ昭和六年十二月と同第百号へ昭和十年四月とに掲載したから、これを讀まれた方は大体おわかりと思ふが、もはや二十年以上も前のことであり、見られる便宜も少いと思ふので、主としてこれにもとずき、その後の旅行によつて得たところをも加えて、私の知つてゐる限りの海運史料を紹介し、研究される方の便に供したいと思ふ。もとより年月を経たことであるから、戦災やその他の事情で私が見た当時のものが、今そのまゝ残っていないかも知れぬ。

青森県は江戸時代には、東部は南部藩、西部は津軽藩の領地であつたが、海運史料の多いのは概して言へば津軽藩の方である。これは昔は日本海

の海運が太平洋の方よりも重要であったことより見ても当然である。しかし南部藩領でも、下北半島や野辺地などは日本海、海運と関係が深いから、かなり多くの史料がある。太平洋岸の港としては、ハブであるから、ハブ藩が南部藩から独立した後、海運史料が相当あるだろうと期待していたが、案外少いようである。尤も私の探訪の仕方がわるかったかも知れぬ。

先ず青森市について見ると、ここはもと善知島村と呼ばれ、能登の地であったが、津輕藩が寛永二耳に港として用いてから発展するようになった。現在善知島神社のある辺まで海が入り込んでいたという。県庁に津輕藩から引継いだ寛文七年の全図の海路図があつて、東北地方の部分は「東北海舟行図」と題し、大へん参考になつた。これは幕府が巡見使を派遣した時にできたと思われ、惜しいことに終戦後固もなく県庁の火災で焼失した。旧家で史料の多いのは、浜町の伊東善五郎家である。同家は屋号を瀧屋といふ、廻船問屋であつた。家の由來を書いたものに「祖先由來伝聞記」

がある。私が当主善五郎氏から聞いたところでは、祖先は名を庄兵衛といい、その本自は明かでないが、他の土地からの移住者であることは確かであり、右の伝聞記などから考えて、青森に来た年代は享保以前である。二代目は下北郡下風呂村から養子に来た人で、その父はこの入かわかぬが、南部の沖合で難船し、下風呂に漂着してそこに住むことになつたのだという。当主の祖父に考太郎といふ人があつて、三十六才で没したので代敷の中に入れないさうであるが、この人の書いた「家内通観」は、嘉永六年九月から明治四年七月までの日記であつて、委しく調べたりは面白いものであろう。また「夫保辛丑年長文録」と題する入船の記録があつて、版引先がわかる。大体、堺から瀬戸内海一帯と、日本海は越前若狭以東、太平洋沿岸では常陸の那珂湊があるだけである。この外に廻船式目が二種類あるが、いずれも越前三國の内田敬三氏所藏のものと同一系統に属する。伊東家は戦災に遭われたが、終戦後に訪問した時の話では、倉庫が一つ助かつてそこに多く史料が入り

てあったこのことだから、多分失われてはいない
と思う。次に浜町の藤林源右衛門家は、屋号を藤
林屋といつて、やはり廻船問屋であった。同家の
史料は今あるかどうかわからぬが、私の見たもの
では、「加定之覚」と題する元禄から安永までの
問屋に関する記録と、文久三年八月の船溜屋規定
書とがよいものであった。伊東、藤林両家の史料
を見、また故老の談話を聴いても、青森と海運の
関係の深かったのは北国は瀬戸内海の方面であつ
て、太平洋方面との関係のことは殆ど見当らぬ。
これを以て見れば、青森は津軽藩が江戸との海運
のために開いた港ではあるが、開港後は、江戸と
の関係よりも寧ろ上方との西廻海運の関係が多く
なつたことが知られる。青森の故老種市有隣氏は
その頃、「津軽史」という大部の写本を持つて居
られた。私は当時それを見なかつたが、その後
に於て君子淵見る機会を得た。今は成田彦栄氏の
有に帰している。これは弘前図書館にある藩の記
録を部類別にしたようなもので、青森県史に主要
な部分は載せられているが、「雑部」が最も役立

つように思う。今は青森市に合併せられた池川は、
戦国時代には奥瀬氏の城があつて、繁華な港であ
り、大浜とも呼ばれた。津軽藩の政策で、青森の
繁栄を訂るために常に壓迫せられた。町役場に貞
享の古図があつた。なお油川の研究については故
西田源藏氏の功を没することはできぬ。

弘前市では先ず図書館にある津軽藩の記録を見
なければならぬ。尤もこれは海運史に限つたこと
ではなく、寧ろ外のことの方が多し。また津軽古
図書保存会の藏書によい旧記類がある。この保存
会は明治二十五年七月費田稻城氏等によつて作ら
れ、主として外崎寛氏の蒐集せられた旧記、古図
等を保存したものだと言つた。外崎氏は古い史学
雑誌に論文などを載せられた人である。弘前の松
野武雄氏は郷土史家で、多くの史料を藏して居ら
れることはよく知られているが、松野氏から聞い
た話に弘前市内の茂森町青海梅太郎氏所藏の額に
十三から岩木川を溯つて弘前に至る図が描いてあ
つたとのことであるが、私は見る機会がなかつた。
また鞘師町の礮沢屋の宅地内にある稲荷社に弘前

から十三に至る図を挿いた絵馬があるとのことで、見に行ったが、水運に關係ある図ではなかつた。岩木川の水運は十三湊の繁官した室町時代から江戸時代の元禄までは盛んであつたが、それから漸次衰えたようである。その運はれた貨物は米は少なかつたと思ふ。米の積込港は鰐澤と青森とであつた。

鰐澤は度々火災に罹つたで、史料はあまり残つていない。中村喜左衛門氏が元禄十六年の凶を所藏せられ、その原因と思われるものを戸沼啓藏氏が所藏せられた。両方共に見たが、元禄の頃は海岸が現在よりも海に突き出していたことがわかる。風浪によつて削り取られたのである。また大塚甚七氏所藏の記録文書を見た。大塚家は大塚屋甚兵衛という船向屋であつたが、加賀の銭屋五兵衛の番頭が、五兵衛の刑死後は鰐澤に未て書いた手記であるといわれる「諸用留」という記録や各船帳などがあつた。戸沼氏の談話によれば、鰐澤には大向屋といわれる大きな船向屋は五軒あつた。塩屋治右衛門、菊屋善右衛門、大塚屋甚兵衛、岐

草屋長兵衛、小浜屋太兵衛の五家で、外に小さい向屋を合せると、向屋の総数は二十軒以上に及んだ。津輕藩が西廻海運によつて米を大坂に運んだのは延宝六年に始まることは、藩の日記によつて明かであるから、この頃から鰐澤も次第に繁栄に向つたであらう。米以外では鮫の正荷が多かつたという。鰐澤は鮫の漁場であつて、春秋二季の漁期には、鰐澤に居る千人の漁夫の外に、津輕から二千人、秋田から千人の漁夫が集つた。戸沼氏から聞いた。また大坂との關係が深かつたので、菓子製法が大坂から伝えられたとの話である。

深浦は港口に多少岩があるが、湾内深く入り込んで風波を避けるに適し、和船時代の碇泊地としては絶好の地形であらう。殊に南から来た船が錨作崎を廻つて一休みしようといふ処にあるから、必ずや寄港する船が多かつたに相異なる。たゞ背後地との陸運の便がよくないので、藩としては鰐澤を米の積込港としたのであらう。深浦では円覚寺所藏の史料を先ず見なければならぬ。そもそも円覚寺といふ真言宗醍醐派の古い寺があつて、船

乗りの信仰を集めているということが、深浦の港としての古さを示すものである。阿倍比羅夫の伝説については否定する人が多いようであるが、とにかくその時代までも潮り得る港であろうと思う。

円覚寺の兼師堂にある絵馬はもと観音堂にあったものだこのことであるが、その中に寛永十年敦賀の庄司太郎左衛門という人の奉納した大きな絵馬があつて、船中遊覧の図を画き、凡俗画として面白いものであるが、敦賀の人の奉納しているのは、越前この海運関係を示すものである。この寺に兼倉時代の奈良西大寺の高僧興正菩薩叡尊の筆と伝えられる真言の法脈を記した二巻の巻物がある。果して叡尊のものかどうかはわからぬが、相当古いものらしく、海運によつて上方から持つて来られたのであろう。また昭和四年八月十二日久六島で採鮑作業中に海中から拾得したという銅板がある。直径縦一尺七寸横一尺の楕円形の薄い板であるが、これらは恐らく南部藩が尾去沢銅山から採った銅を船に積んで野辺地から大坂に送った時に、この附頁で船が難破して沈んだのであろう。次

にこの寺には高田屋重兵衛の書簡がある。これは私がこの寺を訪向する少し前に反古紙の中から発見せられたものだそうである。高田屋重兵衛がロシアに連れ行かれたことを聞いて、弟の金兵衛が無事に生還をこの寺の観音に祈願し、この社の船向屋越後屋にそのことを依頼したもので、重兵衛が帰つたならば必ず参詣させると書いてあるが、この寺に重兵衛の持ち帰つたと伝えられる硝子細工のものなどがあるから、多分参詣に来たものであろう。この手紙は幕末日露外交史上にも面白いものであつて、私は嘗て東北大学の雑誌文化(雜誌)に紹介したことがある。

深浦は浜の町と岡の町に分れ、岡の町は浜の町の背後の山の上にあつて、下から見たのではわからぬから、始めて来た者には、山の上に町があらうとは思われぬ。しかし岡に登つて見ると多くの人家があり、比較的大きな家が多い。阿屋もずつ之昔は岡にあつたさうだが、不便なので海岸に移つたのだという。こゝにも奉行所があり、眺望がよい。莊厳寺という淨土宗の寺があつて、本尊

の阿弥陀如未は、もと岡山の某寺にあつたが、藩主の難仏に遭い、住僧が本尊を背負つて大坂に難を避け、名越源兵衛命正の家に身を寄せて、仏像を源兵衛に譲つたが、源兵衛は夢の告げによつて、仏像を守護して大坂から船で鯉沢に引き、同じく夢の告げで知つた深瀬の貞欣坊という信心堅固の比丘が来たのに合つて、その仏像を譲り渡した。時に延宝七年五月であつて、元禄元年貞欣坊はこの像を莊嚴寺に寄附したと縁起に見える。この話は大坂と鯉沢との海運が開かれて間もない頃に、仏像が持つて来られたことを語るものである。

深瀬で大高桂洲氏から聴いた話は頗る興味があつた。大高氏は旧家で當時は縣會議員であつた。

「俳諧高砂子」という俳書を見たが、深瀬では春から夏にかけて儲けた金で冬は呑気に暮すから、自然に文学に親み俳句が盛であつた。この地の俳人と女国や上方の俳人との間に四季折々の俳句の贈答が行われたが、船便に託して交換したこのことである。向屋は十五六軒あつて、その中で一流は秋田屋、若狭屋、松岡屋、三田屋の四軒である。

船の入津の多いのは旧正月十五六日頃から九月までで、二百十日以後は東廻を取るから、兩歇期となる。この港は一時的寄港地であつて、こゝで集積せられる物資は多くはない。積込す荷物は比較的多いのは春の鯉であつた。船の入港は明治十六年頃まで盛であつたとのことである。

津軽で最も古い港は十三である。私が十三を訪れたのは昭和二十九年であるが、すつと前に喜田貞吉博士の踏査の結果を聞き、また十三史談会長として柳土史の研究に熱心に盡された與田順藏氏からも種々聞いて居つた。しかし實地を見て始めてよくわかつたのであつて、その研究の結果は「津軽十三湊の研究」と題して、東北大学文学部研究年報第七号に掲載した。たゞ文献の残つてゐるものは甚だ少く、「十三往來」や「十三湊新城記」によらぬはならず、これらが一筆史料でないことはいふまでもない。しかし遺蹟に徴して相当根拠のあるものであることは疑なく、鎌倉末期から室町時代にかけて日本海の海運における重要港であることを推測せしむるに十分である。

青森縣の東部即ち旧南部藩領の方で今日最も盛な港はハブであり、ハブの鯨浦は古い記録にも見えるのであるから、史料も多く残っているだろうと思つたが、郷土史に委しい小井川酒次郎氏から聞いたところでは、船向屋をやつた家は或は亡び、或は火災に罹つたりして、海運史料は殆どないとのことである。結局図書館にあると聞いて居るハ藩史稿以外にはあまり見込はなさそうである。しかしこれも考えてみれば当然かも知れぬ。明治維新前は西廻海運の方が東廻よりも盛であつたから、西廻と関係ないハブにはあまり興味ある史料はないかも知れぬ。

これに反して上北郡の野辺地や下北郡一帯は、今でこそ大した処ではないが、日本海の海運との関係が深く、昔は盛な舟着場であつた。野辺地には廻船式目が二種残つている。一は飯田廿五郎氏所藏、一は五十嵐甚右衛門氏所藏である。五十嵐家旧藏の「各船帳」は當時は改中市謙三氏の手にあつたが、野辺地と取引のあつた地方を調べる参考になる。野辺地の盛になつたのは、江戸時代中

期以後、尾去沢銅山から掘出すいわゆる長崎御用銅を積出す港となつてからであるが、この銅の輸送については、鳥谷清四郎氏所藏の「袖平記」が大いに参考となる。また甲市氏と共に野辺地の正史をよく調べて居られた松代直次郎氏所藏の「行司録」もよいものである。松代氏の書かれた「野辺地郷土史南部銅について」といふパンフレットはよくまとまつて面白い。この旧家野坂精一郎氏の家は、代々助左衛門と稱し、向屋業を営んで居られたそうで、江戸中期から明治初期までの記録がかなり多くあつたが、今はどうなつておるか知らぬ。

下北郡は皆は田名部と沢森せられた処である。越前三國の附近、霜保村の久米久五郎氏所藏の文書に、同家の祖先が南部藩の御用を勤めて船で田名部に往來したことが見える。この文書は故内藤湖南博士が探訪せられ、故原勝郎博士が「奥羽沿岸史論」所収の「日本史上の奥州」に引用せられて居る。それで田名部という地名を私は早くから知つて居たが、実地について調査すると、種々面

白いことがわかった。下北郡一帯をよく調べ、「下北地方誌」その他の書を著された世沢善八氏の研究を注意しなければならぬ。尤も笹沢氏が康正年間の下北郡の因と称せらるるものに基きいて論

せられる真などは一考を要するが、室町時代の下北郡の歴史を説くに当って「北郡御陣日記」を引用せられるのは、必ずしも據すべきではないと思う。この「北郡御陣日記」は一名「東北太平記」とも呼ばれ、江戸時代に出来たものらしく、信用できないという人もあるが、必ずしも荒唐無稽のみはいえないであろう。弘前中学校教諭であつた故森林助氏が、南部氏の事情を調査するに當つて早くこれを用いられたことがある。この書に見えているように、室町時代の或る時期に、下北郡を南朝の子孫である北郡王家が支配し、船の出入が多く、商業が盛で、大きな富を築いていたといふことは、全くの作り話ではないと思う。日本海

致したものであろう。その後、八戸南部家の所領となり、八戸南部家が遠野に移されてからは、宗家の盛岡南部家の所領となったが、江戸時代を通じて海運上重要な処である。

田名部という名称は下北郡一円を指すのであつたが、その中心であり、代官所であつたのは田名部の町である。今日では田名部といへば町を指すだけであつて、下北郡一円をいう広い意味には用いられない。田名部町には菊世姓の家が多いが、これは九州の菊世氏の一族が越前金ヶ崎落城の後、海路九州に赴ける途中、漂流して下北郡福浦に着き、それからここに来たのだと伝えられる。その中の一家である岡池郡又部氏が「田名部記」と題する古記録を持つて居られるが、大へん読みにくく、あまり参考になるものではないようだ。その外には殆ど残っていない。常念寺という淨土宗の寺の本尊阿彌陀如来は平安時代の作であるが、元禄年間、京師の本山から買つて持つて来たものだと寺の記録に見えるが、越前から船便で来たのである。町から少し離れた処に、室町時代北郡王家

支配の頃の庄の御所と呼ばれた建物の遺跡がある
と聞いたが、行って見る機会がなかった。津軽の
十三にある寺院遺蹟と共に、今後調査する必要が
あるであらう。

津軽海峡に面する大畑は、私が行った頃は田名
部から自動車で行ったが今は鉄道の終点になつて
いる。大畑川の川口にあつて、和船時代にはよい
港であり、船の出入が多かつたと思われる。今も
北海道との往來があり、割合に開けている。こゝ
で故老宮浦力四郎氏から聞いたところでは、大畑
の村は古くは深しん山やまという処にあつたが、元禄年間
今の場所に移つて来たらしいとのことである。こ
れは恐らくこの頃になつて海運が盛になつたので、
海岸に沿つた土世が崩れたことをいうのであらう。
向屋としては、奥屋善右衛門、青柳宗兵衛、八谷
勘兵衛の三軒があり、小宿は五六軒あつた。こゝ
には五六百石積の船があるだけで、大船は他の土
地のものが来た。近くでは下凡呂の佐賀清之丞と
いう向屋が千石積の船を持っていて、下凡呂の海
は大船を入れることができぬので、大畑に寄港し

たこのことである。大畑は東廻、西廻のどちらの
海運にも関係があり、検石を多く積み出した。船
の来るのは春秋二季で、持つて来るのは米や雜貨
が多く、それらは向屋の手を経て下北郡一帯に売
捌かれたので、その運搬のために村に馬が四五十
頭あつた。また蝦夷地に渡る人の往來する道筋で
あるから駕籠もあつたが、この地の男子は漢索の
ため出稼ぎするので、大工と鍛冶の外は村に居る
のは女子のみであるから、駕籠をかつぐのは女で
あつたといふ。

大畑に残つてゐる書物に「原始謾筆凡土生表」
がある。これは青森県史の編者中道寄氏が早く私
に注意せられたところであり、私の行った頃は宮
浦氏が保管して居られたが、その後には所蔵者村林
源助氏の家に戻つたと聞いている。村林家の祖先
から三代目に當る、やはり源助といつた人が著し
たものである。著者は名を晒明といつて、筆まめ
の人であつたらしく、前編三十三卷、続編十九卷
から成るこの書の内容は、寛永五年から文政三年
までの出米争を隨筆体に書いたものである。前編

の中で巻一と巻四とが欠けている。文化元年に書き初め、同四年に前編を脱稿し、その年の記事までを収めているが、古い時代の分は、もちろん色々の書物や古記録から取ったものであろう。続編は文化五年に始まり、これからは毎年の分を翌年の中に入れて稿しているから、殆ど見聞に基づいたものといえる。記すところは種々雑多で、中には読んで書物の抜萃なほもあるが、海運史料として役立つことも少くない。村林家の祖先は十九代で近江の国から来てこの地に住み、松山の伏塚争業に關係した人である。この書の中に、着者が若い頃江戸、大坂への大旅行をしたことが書いてあって、当時の交通史料としても興味あるものだが、その時京都滞在中に、近江の能登川の近くの祖先の古たぬを訪ねて、親戚の人達と面談したことが見える。そこで私は関西学院大学文学部助教藤本喜一郎君が東北大学在学中に、郷里の神戸に帰られる途中、その地について調査して貰ったことがあるが、今日では全くそういう話を知っている人もない。多分子孫もあるであろうが、古い親戚關係

などは忘れられたものであろう。この書の中に、菅江真澄がこゝに来て暫く滞在し、着者と親交があり、和歌の贈答をしたことの書いてあるのは面白い。またこの地で生れた足羽藍田という字者の父は越前の人であったが、商用でこゝに来て滞在中に、この地の婦人との間に生れたのであり、長して父の生國越前に行き、次いで江戸に於て太宰春台の門入となつたが晩年に生れた土地が恋しくなつたか、田名部の町に来て住んだとのことが書いてあるが、これは海運にまつわる面白い話である。かような緣故によつて、萩生祖徠の學問がこの辺に行われたようである。村林家に今日残っている儒學關係の書物も祖徠派のものばかりである。朱子學が正學とせられたこの頃に面白いことである。大畑から下尻名を經、大岡崎燈台を右に見て、佐井に渡する。これよりさきは自動車の通る道がない。江戸時代に本州から蝦夷地に渡るには、津輕半島から行く時は三厩から乗船し、下北半島から行く時は佐井または大岡から乗船した。殊に佐井は大岡に比して海が安全であつたので、上役人

がこゝから乗船したこのことで、交通の要路に当り、盛であつたらしいが、今は淋しい村である。こゝは大佐井、古佐井の二つに分れている。百は古佐井の方が盛で、藩主の舟藏などもあつたが、天明の飢饉の頃から大佐井が盛になつたという。村役場には多くの古記録があつたが、保管があまりよくなかつたから、今は或はなくなつたかも知れぬ。故老松谷賢治氏から聞いたところでは、松谷伝四郎、樋口三九郎、金丸七右衛門という三軒の阿屋があつて、いずれも五百石積の船と百石積の船とを一艘ずつ持つていた。五百石積の船には松材を積んで一年一回加賀金沢に行き、百石積の船には海産物を積んで一年二回越後新潟に行った。加賀に行く船は、帰郷の時には米や稗を積んで来る。稗は私大工の食料であつた。盛な阿屋では一年中加賀米ばかりを食べ、津軽米のような賤の悪い米は用いなかつた。これは一年一回の航海で、その年に食べて余る程の米を持つて来ることで、またからである。加賀の船の来るのは二三年に一度だけで、毎年来るのではない。大坂から来る船

は十月か十一月頃に野刃地などに行つて積荷を下し、それからこゝに來て木材や簀を積んだこのことである。

古佐井の旧家に能登繁太郎氏がある。屋号を能登屋といつたそうで、二百年はかり前までは辨取船を所有して廻漕業を営み、江戸と大坂とに支店があつた。しかしどちらかといへば、大坂との関係が深かつたという。その後廻漕業を止めて本陣となり、傍ら阿屋を営んだ。江戸時代の末期に入つて、蝦夷地の開発が始まると、蝦夷地との交通が多くなり、上役人がこゝから乗船したので、本陣を設ける必要が起つたからであるとのことである。そして股本陣には伊勢屋という家があつた。かように本陣、股本陣の設備があつたのを見て、交通がかなり盛であつたことが察せられる。能登家所藏の地図に「日本海上湊之覺書」というものがあつた。

下北半島の南岸、大湊、川内、股野沢方面は内南郡と称せられる。私はこの方面を調査しなかつたので、こんな史料が残っているかゆからめが、

世天氏の指書などから考えても、あまり期待できぬようである。大湊の辺は、（北に）安波、（西に）大平と称した。郊で、境國から来た船がこゝに淀泊し、荷物と小舟に積み替え、田名部川を溯つて、田名部の町に送られた。田名部川は今は水量も少く、水もきれいではないが、昔は川幅が広く、水も清く、かなり大きな川船が出入していたそうである。舟着所の跡には民布倉が残っていたのかいふことである。盆踊の歌に、「田名部横町の川の水飲めは、七十婆さまも若くなる」といふから、もちろん飲むことのできるような清い水が流れていたに相違ない。しかし田名部の町は海から入り込んであるので、港ではない。大畑方面との連絡はもちろん陸路によるのであって、荷物は恐らく馬背に載せて運ばれたものであろう。こうして田名部の町が下北郡全体の経済上の中心であった。そして室町時代以来富の力も大きなものであったろう。盛岡の南部氏が八戸南部氏の封を遠野に移して、こゝを自分の領地としたのは、その富力に着目したものである。

青森県下の海運史料はもちろん以上を以て盡きたものではない。なお各地に史料が残っているであろう。殊に津軽半島の北端三厩を調査してないのは、大きな欠陥であらう。しかしこゝに述べただけでも、日本海運史上の青森県の重要性がうかがわれるから、今後益々こゝの方面の研究の進むことを希望してやまないものである。